



特集

世界文化遺産「高山社跡」

ふじおかの宝が世界の宝物に

# 祝・世界文化遺産 「高山社跡」

日本近代養蚕法の標準「清温育」の発祥の地・高山社跡は、藤岡市民の誇りであるとともに、

世界の絹産業の発展と絹の大衆化をもたらした歴史的遺産です。

平成26年6月、「富岡製糸場と絹産業遺産群」として、

世界文化遺産に登録されたことで、

ふじおかの宝物は、日本、

そして、世界の宝物になりました。

## 生糸の大量生産を実現し 絹産業の発展に貢献

平成26年6月25日、ユネスコ世界文化遺産に登録された「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、長い間生産量が限られていた高品質生糸の大量生産を実現し、絹産業の発展をもたらした遺産です。

富岡市の「富岡製糸場」、伊勢崎市の「田島弥平旧宅」、本市の「高山社跡」、下仁田町の「荒船風穴」の4資産で構成され、それぞれが技術革新の場として発展し、かつて一部の特権階級のものであった絹を世界中の人々に広め、高級繊維を身近な存在に変えました。

## 日本の近代養蚕法の標準 「清温育」を開発した場

市街地から県道下日野・神田線を桐山方面へ車を走らせると、世界遺産「高山社跡」が見えてきます。静かな山あいにはひっそりとたたずんでいるのが、江戸時代後期に建築された長屋門。そして、その門の向こうにあるのが、高山長五郎の生家であり、高山社発祥の地となった母屋兼蚕室です。

高山社は、長五郎が確立した養蚕法「清温育」を全国に広めるためにつくられた養蚕技術の教育機関です。高山社は、この蚕室からスタートし、やがて、全国62か所にまで拡大。約4万人の社員と1200人の生徒を抱える大きな養蚕技術の教育機関として成長しました。

## 養蚕農家を助けたい！ 高山社はそんな思いから始まった

昔、蚕の飼育は「お天気まかせ」「神様仏様頼み」と例えられるほど、難しいものでした。とくに、「白彊病（別名コシヤリ）」という蚕の病気が発生すると、丹精こめて育てた蚕が全滅してしまうなど大きな被害を受けました。養蚕は、江戸時代から農家の重要な収入源。それだけに、蚕の不出来に苦しむ農家が多かったといえます。そんな姿を見て幼少期を過ごしたのが長五郎です。養蚕をしてきた長五郎の祖母もまた、突然やってくるコシヤリという目に見えない敵に泣くことがあったといえます。

養蚕農家が少しでも楽になるように、そんな思いで、長五郎は養蚕法の研究に励みました。自ら養蚕を始め、コシヤリのために失敗を繰り返しながら、「清温育」の基礎となる温湿度管理と換気による飼育法の研究を続けました。そして、長五郎はその研究成果を養蚕農家に惜しみなく教えました。その一方で、より良い養蚕法を求め、ひたすら研究を続けたのです。

「清温育」は、蚕室内の温湿度管理を細かく行い、蚕の快適な生育環境の維持を重視しました。今も残る蚕室は、通風のために障子が大きく開く事や、屋根に熱を逃がすための天窗があるなど、清温育を行う仕組みが設けられており、模範的蚕室としてここで学んだ養蚕農家に強い印象を与えました。





## 会遊亭

大正時代の蔵を利用した観光案内施設です。平成25年6月、街中の活性化を目的に、中央通り商店街に誕生しました。高山社跡や市内観光の情報を発信しているほか、藤岡の名産や絹関連の小物を販売するお土産コーナーもあります。また、休憩スペースはイベントスペースとして開放。藤岡北高の生徒が開発した高山社跡にちなんだスイーツを販売するイベントなど、さまざまな団体に利用されています。



## まゆ花の会

平成25年、市内で活動していた3つのまゆクラフトグループが一緒になり、まゆ花の会として活動を開始。高山社や養蚕の歴史を勉強しながら、まゆクラフトづくりや座繰り実演、自主的に高山社跡の掃除などを行っています。「高山社跡とつながりを持ったことで、人の輪も作品も広がった」と話すのは会長の沢入千賀子さん。まゆクラフト作品や座繰り実演を通して人々と交流を図り、高山長五郎と高山社跡の素晴らしさを伝えていきたいと話しています。



## まゆダーマン

さまざまなイベントに登場するたび、子どもたちに大人気のまゆダーマンは平成22年から、上州ふじおか絵巻の会のメンバーとともに、藤岡市の養蚕の歴史と文化をPRしようと活動しています。平成25年には、高山社跡世界遺産登録推進キャラクターに公認され、「まゆダーマン体操」や「まゆダーマン紙芝居」などを通じて、藤岡の歴史を子どもたちにわかりやすく伝えています。



高山社跡を核に広がる

絹のまち・藤岡

## 高山社を考える会

平成20年に会を発足して以来、高山社の歴史を学ぶと同時に、その日本の絹産業発展に寄与した高山社の功績を史料にまとめるなど、高山社の価値を伝える活動をしています。「高山社の価値とは、『みんなで豊かになろう』と、人々に技術を分け隔てなく教え伝えたこと」と話すのは会長の小坂裕一郎さん。今後も、高山社跡を訪れる人々に、「みんなで豊かになろう」という高山社の心を持ち帰ってもらえるような活動をしていきたいと話しています。



## 「清温育」確立 藤岡から全国へ、アジアへ

繭の品質、糸の質などの研究も行い、ようやく確立させたのが「清温育」です。当時、主流だった換気を重視した「清涼育」と、蚕室を暖めて飼育する「温暖育」の長所を取り入れ、蚕室の温度調整や換気を行うもので、明治17年（1884）、清温育の普及のため、長五郎は自宅に養蚕改良高山社をつくり、養蚕飼育法の指導を本格的に始めました。このとき、長五郎は54歳。25歳で養蚕法の研究を始めてから30年近い歳月をかけ、養蚕技術の教育機関を設立しました。

長五郎は全国各地から集まる生徒に格安で分け隔てなく、清温育の技術を教えました。しかし、明治19年（1886）、長五郎は56歳の道半ばで亡くなってしまいました。愛弟子である町田菊次郎に「清温育を全国に伝え、蚕業の改良を図って、国利民福を増進しなさい」という言葉を残したといわれています。「国利民福」は、人生の大半をかけ養蚕法の確立に取り組み、その研究成果を惜しみなく教えた長五郎の人生を物語る言葉です。

長五郎から高山社を託された菊次郎は、明治34年（1901）、明治時代では全国で唯一の私立甲種学校の「私立甲種高山社蚕業学校」を創立しました。養蚕技術のほか、一般教養も教えた高山社蚕業学校には、北は北海道、南は九州、さらに、朝鮮や中国からも多くの生徒が集まりました。そして、「清温育」は全国標準の養蚕法と呼ばれるようになったのです。

## 高山長五郎

### 座右の銘「国利民福」



近代的な養蚕法「清温育」を全国へ普及指導した高山社の創立者です。長五郎は18歳で家を継ぎ、名主となりました。幼い頃から養蚕の不出来に苦しむ農民の姿を見続けてきた長五郎は25歳の時、養蚕の研究を始めました。試行錯誤の中から確立したのが「清温育」です。長五郎はその養蚕技術を分け隔てなく教える養蚕教育機関高山社を設立。その2年後、志半ばで亡くなりました。

## 町田菊次郎

### 座右の銘「救世済民」



高山長五郎の「国利民福」という遺志を継ぎ、高山社二代目社長となりました。弱い人のために尽くす「救世済民」を座右の銘とした菊次郎は、積極的な行動力と優れた判断力を生かし、明治34年、明治時代では全国で唯一の私立甲種学校「私立甲種高山社蚕業学校」を創立。社員制度、優秀な卒業生を全国に派遣し指導にあたらせる授業員制度、分教場制度等の事業を整備拡充しました。

世界遺産登録決定の瞬間！

ドキドキ ワクワク 6月21日 ドキュメンタリー



受付開始とともに多くの市民が詰め掛けました



高山社跡に設置された特設ステージ



パブリックビューイングで最後の応援

午後2時30分受付  
期待に胸を膨らませた市民が集結

平成26年6月21日、運命の日がやって来ました。この日は、ユネスコ第38回世界遺産委員会の世界遺産会議において、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界文化遺産に登録されるかが決定する大事な日。世界遺産を目指し、高山社跡を応援してきた市民にとって、待ちに待った日です。

高山社跡に設けられた特設会場には、午後2時30分の受付開始とともに、世界

遺産登録の瞬間を祝おうと、多くの市民が集まりました。特設ステージには、くす玉が掲げられ、その横には、カタル・ドーハでリアルタイムに行われている世界遺産会議のようすが流れるモニターが置かれています。

午後3時開会  
パブリックビューイング開始

午後3時、いよいよ開会です。藤岡市民6万8千人が待ちに待った高山社跡の世界遺産登録の夢が達成できる瞬間が刻一刻と迫ってきました。登録決定までの間は、パブリックビューイングで審議のようすを見守りながら、最後の応援を届けます。

ドーハ審議は英語で進められます。そのため、同時通訳を介し、審議状況が知らされます。

世界遺産登録までの道のり

高山社跡を含む「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産推薦候補に正式決定したのは、平成24年8月23日のことです。同年9月25日、国からユネスコ世界遺産

午後4時32分、審議スタート  
午後4時55分、歓喜にわく

午後4時32分、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の新規世界遺産登録審議が開始されました。イコモスによる勧告内容及び審議対象の概要説明の場面では、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の紹介写真が画面に映し出されました。高山社跡の番になると、会場から「わあー」といった喜びの声がこぼれます。目の前にある高山社跡の写真が画面に映し出されると、緊張がピークに達しました。

各委員による審議では、ユネスコ委員が「支持」、「不支持」を表明していきます。「支持」、「支持」、「支持」と、すべての委員から支持が表明されると、4時55分、議長が裁決を行い、全会一致で「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界文化遺産登録が決定されました。

万歳三唱、くす玉割り  
喜びにあふれる特設会場

世界遺産登録決定が決まると同時に、会場は歓喜の声にわきました。特設ステージには、新井利明市長、冬木一俊市議会議員、高山社を考える会の小坂裕一郎会長ががり、小坂会長の発声で万歳三唱が行われ、高山社跡に「バンザイ」の掛け声が響き渡りました。続いて、美九里西小学校児童会の児童たち、まゆダーマンが加わり、ステージ上にあつたくくす玉が割られました。会場は鳴り止まない拍手で大盛り上がり。世界遺産登録の喜びを会場にいた約250人の関係者や市民で味わいました。



新井市長、冬木市議会議長、小坂会長、美九里西小児童、まゆダーマンによるくす玉割り



万歳三唱。大きな声が響きました



歓喜の声にわく会場



喜びにあふれる会場



画面に高山社跡の写真が映し出されました。いよいよ審議開始です



審議のようすを見守ります

センターへ世界遺産推薦書暫定版を提出しました。  
その1年後である平成25年9月26日、ユネスコの諮問機関の一つ、イコモス(国際記念物遺跡会議)の調査員が高山社跡へ調査に訪れました。その調査員の祖父は、なんと高山社で養蚕を学んだ卒業生。高山社の教え・技術は中国の養蚕農家にまで伝わっていたことがわかりました。イコモスの現地調査から7か月後の同26年4月26日、イコモスから世界遺産一覧表への「記載」が適当との勧告が出されました。そして、同年6月21日、運命の日を迎えたのです。



美九里西小児童が作文を披露



懸垂幕が掲げられた高山社跡

世界遺産とは.....

1972年の第17回ユネスコ総会で採択された世界遺産条約(世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約)に基づいて世界遺産リストに登録された自然・文化遺産です。遺跡、景観、自然など国や民族を越えて共有すべき「顕著で普遍的な価値」をもつ人類共通の財産です。2014年6月現在で世界中から1007件が選ばれており、日本には18件あります。